



「思い出のアルバムから」

加山 久夫

もう五十年以上も前のことになりますが、ある日、ルーテル・アワーと呼ばれるラジオ放送が私の耳に飛び込んできました。その始めと終わりには実に美しい讃美歌の合唱が流れ、もっぱらそれを聴くのが楽しみで、すっかりこの番組の愛聴者となりました。そして、毎回の明治学院大学合唱団の紹介で、明治学院大学の名は、遠く関西の地にいた少年時代の私の脳裡に深く刻まれたのでした。この明治学院大学合唱団は後にグリークラブと改称されることになりますが、将来この大学に勤務するようになり、しかも、グリークラブの顧問を務めることになるなどといったことは、もちろん夢にも思いませんでした。人生の不思議な出会いを思います。

私は来る三月末をもって定年により退職、本学専任教員としての24年間の勤めを終えます。専任になる前の非常勤講師の2年間を加えると四半世紀ということもできるでしょうか。それ以前から、今は亡き秋元徹先生とキリスト教学校教育同盟の会合などでしばしばご一緒し、親しくお付き合いをいただいていたのですが、当時の勤務校で盲人に入学試験の受験資格を与えるかどうかについて検討中であり、すでに盲人に門戸を開いていた本学に秋元先生をお訪ねし、関係の方々をご紹介いただいたり、さまざまの参考資料をいただいたことがありました。障害者への木目細かい配慮に深い感銘を受け、さすがに社会福祉学科をもつ明治学院大学だなど

思ったことでした。

24年間の大半は旧一般教育部に所属していましたが、さまざまの異なる研究分野の同僚との交流はとても刺激的で楽しいものでした。その意味で、キリスト教研究所においても、学部横断的に、さまざまの専門領域の先生方との共同研究に参加し、語り合えたことは大変幸せでした。また、制度的観点からも、神学部やキリスト教学科といったものを持たない本学において、キリスト教研究所の存在は大きいというのが、私の実感です。学内的のみならず、対外的にも、数多くあるキリスト教関係大学との交流の窓口としての役割も決して小さくありません。その点で、わが国においてもっとも古い歴史をもつキリスト教学校の一つとして、その貢献を期待されているところ決して少なくないのです。キリスト者であると否を問わず、さまざまの学問領域でキリスト教的価値や文化と接点をもつ方々に、一人でも多く参加していただける開かれた活動の場として、キリスト教研究所がさらに発展することをこころから期待しています。もちろん、このような共同の営みはいつでも、どこでも起こり得ることであり、中山弘正学院長時代の敗戦五十年の一連のプログラムや明治学院120周年を記念する一連のプロジェクトには、生き生きとしたムーブメントとしての息吹を感じさせるものがありました。その意味では、久世学院長のもとで続けられてきた明治学院バツハア카데미もその一つだと思います。もう6年前のことになりますが、その日のチャペル・アワーはオルガニスト長谷川美保さんによる音楽礼拝でした。出席者はごく少数でしたが、その中に樋口隆一先生が来ておられて、礼拝後の立ち話のなかで、明治学院バツハア카데미の構想を熱い思いをもって語られました。そこにいた橋本茂、金井創、長谷川美保諸氏らとともに、私もこれに大賛成し、〈作戦会議〉の後、久世学院長と大場学長に会いにゆき、協力を要請したのでした。多少の紆余曲折はあったものの、結局、「学院長プロジェクト」として、樋口先生のすぐれた指導と献身的な働きのもとに、いまでは明治学院の誇るべき文化的発信基

地になっています。本学には、このような潜在的可能性が豊かにあり、これからもますますそれらが顕在化してゆきますよう、私は、本学に関わる機会を与えられたことに感謝するとともに、これからも一人のOBとしてエールを送り続けたいと思っています。

(かやま ひさお 所員・文学部教授)